



常に情深い心を湛へて居た。此場合に於ても彼の心情の温い潮は兄弟達の不信任が流れに投じた新し妨害物を超えて、溢れ流れた、彼の答は彼等の態度の爲めに毫も變る所ない愛を新しく證明するばかりであつた、彼は今迄と同じ様に、その後も彼等を養つて行つた、彼は其名譽を彼等と共に分けたのである、彼はまた土地馴れない彼等の世話を善くし、子供の面倒も見てやつたのである、「彼等をなぐさめ懇に之にかたれり」。

これらの事があつて後、ヨセフは五十四年間生きて居つたが、この長い歲月の間の事は、一つも私共に語られて居ない。私共は名譽に満ちて有用な生涯を送つた、彼の楽しい立派な老年時代を想像する事が出来る。彼はエヂプトの國を救つた人である、されば彼が其生涯の終まで、國民から常に感謝されて居つた事は容易に點頭されることである。

彼は死ぬるまで美しい生涯を送り續けた。老年時代が其少年時代の豫言と約

束とを成就して居ない事が屢々ある、生涯の子午線を通るまでは、氣高く美しい生活をして居た人で、生涯の暮に近くに從つて其美しい品性、其優しい心を失ふ者が間々ある。青年のためにされたる説教は澤山ある、青年は勿論危険の多い者であるから、絶えず警告する必要があるが、然し青年のみでなく、段々年を取つて行く人にも、又よく勸告する必要がある。老年時代にも其時代の危機と誘惑とがあるものである、次第に年の數が増して來た時に、其身の圍りに集まつて來る價値ある善き生涯の名譽のために、瑕つけれないと云ふ事は困難な事である。成功した時に、立身した時に、勝利の生涯の實を結んだ時に、又幸福な老年の日を送る時に、誇らず高慢らず、心を謙遜に保つて、質朴な優しい生活をして行くこと云ふ事は六ヶ敷い事である。傲慢になつて意張り廻す老人が多い、二言目には直に自分を賞め自分の昔話を自慢する老人が多い。

今迄せつせと働いて身を粉にし、苦勞をして來たお陰で、樂隠居をすること、

それが必ずしも最も幸福な生活であると云ふ事は出来ない、又それが其人の品性を最もよく現はす所の境遇でも無い。重い荷を負ひ、大いなる責任を感じ、絶間なく働き、又酷い試に耐へて立派な人よと云はれた者が、其荷をおろさねばならぬ様になり、其事業を中止して社會から離れ、人生の事業を全くなし終へた人々の送る静かな生活に入り込んでから、以前の高潔を失つた者が随分ある。小人は閑居して不善をなす、最も静かであり最も幸福であるべき其日其時に、彼等の平和は破れるのである。彼等は自分達が段々年を取りつゝある事を告白し、若い者等に其重荷と責任のある所を譲る事を嫌つて居る、彼等は過去の智慧と名譽とに據りて、現在の衰へ行く力を以てして充分よく充たす事の出来ない地位に、餘りに長く留り過ぎる誤ちを幾度となく演ずる、此點に於て老年時代にも苦しい試がある。

それから又時に依ると、老年時代は不幸と不満とを招く場合もある。これは

何も不思議な事ではない、一人去り二人去り、仲のよい友や親しい同僚が、死の持ち來らす抵抗し難い壊滅の中に形貌を隠して、自分の影が次第々々に淋しくなつて來る其時に、自分の手には何等なすべき事もなく、自分が今迄して居つた事は悉く他の人がするのを側で見て、それでも優しい温和な心を保つて行くこと云ふ事は六ヶ敷いことである。それに年を取ると身體が弱つて來て、美しい生活を送る事が段々困難になつて來るものである。

此等が、何故老年時代にある人が、青年時代又は中年時代にある人よりも、品性の激しい試を多く受るか云ふ理由である。青年時代には氣高く立派に暮して居て、老年時代に至つてから過つ人が澤山ある、キリストの恵は併し青年時代に於けると同じく、老年時代の試練と困難とに對しても充ち足つて居る、私共は私共が死ぬる際まで、始終美しい生涯を送り得る様に心掛けねばならない、午前中氣が晴々する様に、午後濃碧の空と神々しい静けさまで、實に

よい氣持のものでなくてはならない、日の出が輝と光とを以て榮光に満ちて居る如く、日没は琥珀と黄金の光彩をもつて壯麗なものであるべきである。老人、又は老人になりつゝある人は、青年や強い大人と最早同一步調をとつて進み得なくなつた時に、自分の仕事、自分の最もよい仕事、既う終つたのだと一時でも思つてはならない、老年に至つての仕事は、青年時代に於ける仕事と同じく必要である。若い人には活動、老いたる人には思索である。激しい人生の戦を終へて、靜かに餘生を送り得る人の生活は、今迄送つて來た烈しい争闘の生活より、一層美しく一層キリストに似た、一層健全な生活で有べきである、生活は其が段々終りに近いて行くに従つて、美しさが増して行かなければならない。誰でも成年時代を無事に通り越して、老年時代に近いて來た時に、楽しい眞の生活を爲し終つたと思つてはならぬ、否私共は永遠の門に行き着くまで、私共の勤勉、忠信、常に祈る事、キリストを信仰する事を止めてはなら

ないのである、神の計畫は人生の全體に通ずるものである。

我と共に生きよ！ 最善を盡せ、

人生の終りにも、

其始に於てなしたるが如く。

我等の運命は斯く語り給ふ主の御手にあり、

「我は全體を造れり、

青年は其半を示すのみ、

神を信じ全體を見よ、恐るゝ勿れ」云。

チャーミング博士は嘗て、「私は斯う云ふ事が出来たら大變良からうと思つて居る、それは私共が六十年生き永らへる事が出来たら、其次は人間の生涯の第七期に入ることゝなる、で若し出来る事ならば、其を私共の地上巡禮

の安息年として、恰も永久の國の岸邊にある如き心地をもつて、或は天にある幕屋、高きにある宮の外庭にあるが如き心地をもつて、安息年らしく過したい』と云れたさうである。此事を私に告げた男は、彼自身随分の老人で、こゝに所謂安息年を既に迎へ、常に其を眞の主の日としようと努めて居る人なので、チャーマーズ博士の言に附加して、『これは美しい思想である、同時に眞なるものである。老年時代は待ちつゝ、祈りつゝ、望みつゝ送るべきの時である、又私共が近づきつゝある天と、私共が間も無く相見えんとして居るキリストの、愛と平和とを他の人に反射すべきの時である』と云つて居た。

終に誰にも此時が來なければならぬ様にヨセフにも死ぬべき時が來た、『ヨセフ其兄弟等にいひけるは、我死ん神かならず汝等を眷顧なんぢらを此地よりいだしてそのアブラハム、イサク、ヤコブに誓ひし地にいたらしめたまはんと、ヨセフ神かならず汝等をかへりみたまはん、汝らわが骨をこゝよりたづさへの

ぼるべしといひてイスラエルの子孫を誓はしむ、ヨセフ百十歳にして死たれば之に爨りて櫃にをさめてエジプトにおけり。

爨ると云ふ事は、大變費用の要る方法であつた、ヨセフの體がチャンと用意されること、それを立派な布で包んで、石又は木の櫃に納め、或は木乃伊箱の中に入る。エジプト人の葬儀は、一體に中々鄭重なもので有た、そしてヨセフはエジプトの國につくした偉大な功績に依つて、最高の名譽を以て葬られるべき者であつたが、彼は凡てこれを拒んだ。不思議な國エジプトの廢墟のうちに、ヨセフの爲に用意されたと思はれる墓が発見されたと云ふ事である、其墓があつたのは、或エジプト王のピラミッドの側で、皇族の墓の如くにつくられ、其上に「エイツフ」(ヨセフの意)と銘され、「アブレク」即ち拜すべしと云ふ意味の尊稱が書かれてある。この墓がヨセフのために作られたものであつたにしても、彼は其體を其の内に横へる事を拒んだのである、彼はエジプト人では無い、イスラエル

人である、モーセの如く異教國の民から榮を受くるよりも、彼自身の民の苦難をわかつ事を撰んだのであつた、ヨセフは敢てエジプトに其骨を埋めなかつた、彼の體は其處に置られたけれど、其處に葬られたのではない。エジプトは長い歲月彼の家庭であつた、彼が多くの名譽を受け、多くの勝利を得たのも此の地であつた、彼の妻もエジプト人であつた、彼の友もエジプト人であつた、然し彼は猶忠實なるイスラエル人の一人として、エジプト人の墓には入らなかつたのである、彼はイスラエル人の墓に葬られた、これはヨセフの遺言の第一に命じた所である、彼は實に愛國者であつた。

これには尙外の考がある、希伯來書中にヨセフの信仰に就て記せる所があるが、其處には彼の骨に就ての命令が特に示されて居る「信仰によりてヨセフは死んとする時に、イスラエルの子孫のエジプトより出る事について語り、又おのが骸骨の事に就て命じたり」これが如何して彼の信仰を示して居るのであら

うか？ これは彼がイスラエルの民に就ての神様の約束を信じて居つた事を示して居るのである、彼の信仰は彼がエジプトに葬られる事を拒んだ程非常に強いものであつた、彼を埋葬する事は、イスラエルの民がエジプトを出で、彼等自身の國に歸る迄待たなければならなかつた。

ヤコブとヨセフの死ぬる時の遺言の差違を氣をつけて考へて頂きたい、ヤコブは矢張りエジプトの地に埋められる事を拒んだ、彼は十七年間其地に幸福なる生涯を送り、彼の家族もよく土地になじみ、彼の子は全國の人々から敬はれて居つた、然し彼は、自分の先祖の側に葬つて貰ふ様に命するまでは、如何しても死ぬる事が出来なかつた。ヨセフの遺言はこれと相違して居る、彼はエジプトに埋めらるゝことを望まなかつたが、併し彼の死骸は彼の民がカナンに行くまで、其儘エジプトに留めて置くようにとの事であつた、彼は彼の民がエジプトを出で、約束の地に歸る事を堅く信じてゐたので、其時まで彼の木乃伊

は決して墓に眠らせてはならぬと言ひ置いた。

ヨセフが何故斯かる決心をしたかと云ふ事に就ては、特別な理由があつた、彼は自分の死後其骨にも何事か善い働をさせようと願つたのである。イスラエルの民は、彼等の前途に横つて居る長い暗い歲月の試練の中に在つて、彼等の心に神の約束の記憶とカナンを愛しカナンに歸り行く希望とを常に持ち續ける爲めには、その生活に大いなる感化を與へられなければならなかつた。彼等の先祖の墓がカナンにあると云ふ事——それは確かに彼等に故郷を愛し故郷に歸りたいと云ふ念を起させた、併しヨセフは自分の木乃伊を埋めさせず、彼等の間に置き、カナンの地に運ばれて、其處に葬つて貰ふ時を待つて居る方が、マクベラの洞穴に直ぐ眠らせて貰ふよりも、一層彼等の心に望郷の念を盛んならしむるに違ひないと考へたのである。彼等はヨセフの死骸を見る度毎に何故其が葬られないのであるかを考へ、其約束の地に思を走らせるのであつた。

段々エチプトの世も暗くなつた、ヨセフの友であつたパロ王の御世が、今度はヨセフの事などは忘れて、イスラエルの民の繁殖して行くのを嫉む王の代に代つて、(出埃及記第一章参照) 烈しい迫害が續いて起つた。三日間暗黒が續いた時にも、(出埃及記第十章廿一節より廿三節まで参照) ヨセフの埋められない死骸と、其無言に語る希望の言葉が、どれ程彼の民に勇氣を與へ、彼等を失望から救つたか分らない。

或夜ゴセンの地に驚くべき出来事が起つた、(出埃及記第十二章廿九以下参照) イスラエル人がエチプトを出づべき時が来たのである。聖書には「其時モ一セはヨセフの骨を携ふ、是はヨセフ神かならず汝らを眷みたまふべければ、汝らわが骨を此より携へ出づべしといひて、イスラエルの子孫を固く誓はせられたるなり」と記されてある。それから四十年間、彼等は荒野をさまよひ歩いたが、此間ヨセフの木乃伊は常に縦列若くは陣營の中に保護されてゐた。

或日遂にシケムの地に葬儀が行はれた、(約書亞記第廿四章廿九節より卅三節まで参照)そしてエチプト人の木伊乃箱の中に納められて居た、これ等の骸骨がヨシユアの手によつて安らかに埋められたのである。聖書にはかう書いてある、「ヨセフの骨を、昔ヤコブが銀百枚をもてシケムの父ハモルの子等より買取りしシケムの中なる一の地に葬れり」聖地を旅行する旅人は、シケムに行けばヨセフの墓を見せて貰ふ事が出来る、それは彼の兄弟がヨセフを殺さうとして投げ込んだドタンの葬の直ぐ附近である、今や彼の墓は崇められ、嘗て大なる罪惡の行はれし地は、義しき者の眠れる地となつて居る。

私共はヨセフが死ぬる時に云つた言葉のうちから、二つの教訓を得る事が出来る。一つは信仰に就ての教訓である、「我死ん神かならず汝らを眷顧たまはん」、彼は死んでも神は永久に活き給うて、神の御事業は續いて行くのである、「神は其働人を葬り給へど其御業は止まず」、私共は此世の中に何か小さなもの

を建てようとする、そして其途中で死ぬるけれども、其業は續いて行はれるのである、神様は永久に生き給うて、其計畫と目的とは死なないからである。

も一つの教訓は、私共の一生の記憶と其感化とが、私共の死んだ後までも、猶世の中に残つて居る人を勵ます様に生活せよと云ふことである。義しき人の記憶は幸福である、彼の民の間に居られたヨセフの覆られた死骸は、生前なしたる彼の氣高い行を語つて居るのみでなく、又未來に對する望の言葉を常に告げて居る。即ち「ここはお前共の故郷ではない、お前共は此地に異國人とし又巡禮者として止まつて居るに過ぎないのだ、やがてお前共は進み行かなければならない」と云つて居るのである。

私共の一生が、又私共の記憶が、他の人の心に及ぼす印象は、常に斯くの如きものであらねばならぬ。私共が死んだ後にも、私共に就いての凡ての回想が、他の人をして天を故郷の如く思はせる様に生きなければならぬ、私共の





326  
414

終

